

2025年度 地域連携活動助成金 活動成果報告書

1 活動概要

活動団体名	問題分析ゼミナール（3年）、問題解決ゼミナール（4年）、 問題発見ゼミナール（2年）
活動テーマ	関係・交流人口活動の協創を通じた観光圏の社会実装化 (仮称；DMOカレッジの構想)
活動期間	2025年5月20日 ～ 2026年2月28日
主な活動場所	新潟県 南魚沼市、津南町、佐渡市
連携地域	新潟県 南魚沼市、津南町、佐渡市
連携団体等	<p>[地域横断的な取り組み] 一般社団法人 雪国観光圏 代表理事・井口智裕</p> <p>[新潟県・南魚沼市] 株式会社「FMゆきぐに」 南魚沼市役所・U&I ときめき課・課長 若井勉 一般社団法人 愛 南魚沼みらい塾</p> <p>[新潟県・津南町] 津南町役場観光地域づくり課 越後妻有「上郷クローブ座」</p> <p>[新潟県・佐渡市] さどやニッポン 一般社団法人 佐渡観光交流機構 佐渡市地域産業振興課地域支援係</p>
活動者数	19名 ※ 活動に参加した本大学の教職員及び学生の人数を入力してください。

2 活動概要 ※活動内容や活動成果は地域連携センターHP等で公表します。

活動目的（地域が抱える課題との関係や活動により期待される効果等、本活動が地域の課題解決や活性化につながる事が分かるように記入してください。）

スタート型：新しい地域連携活動を着想した背景、また必要性について記載してください。

ステップアップ型：「過年度の活動内容」を記載の上、今回の申請の「発展性」あるいは「応用内容」などを記載してください。※過年度の活動が無ければ記入不要です。

「過年度の活動内容」

過年度を「1. 2023年までの取組実績」、「2. 2024年・本助成金による取組」に、また、「3. 2025年に実施した取組の発展性／応用内容」の三点に分けて説明をする。なお、南魚沼班は12月までの活動で作成したモデルの発展を2月の活動でさらに応用される活動を実施する。

1. 2023年までの取組実績

川島ゼミナールでは、「**里山と都会の情報コミュニケーション**」を標語に地域活性化／地方創生を主題とした関係・交流事業の実習教育に四半世紀にわたり取り組んできた（静岡県〔旧〕水窪町、青森県西目屋村、福島県北塩原村／新地町、長野県南信濃村／小海町／大鹿村、富山県立山町等、学部ホームページなど参照）。

コロナ感染症による交流停止と再開

コロナ感染症の影響で2019年から2021年の三年間、地方との関係・交流事業は全国的に停止を余儀なくされた。2022年度は、その全国的な再開の年となり、総務省は「ふるさとワーキング・ホリデー」の施策を開始し、新潟県南魚沼市がこれに採択された。同市U&I ときめき課、並びにその実施主体となる愛 南魚沼みらい塾理事と協議し、これをゼミ生の実習派遣に設定し、同市が刊行する移住媒体『LIFE in』の編集をインターンシップとして組み入れることで、ゼミの地域連携教育を再開した。2022年は、同誌の6ページを編集し、刊行することができた。また、Instagramによる観光資源の紹介などを実施した。この活動が後に佐渡市・津南町との交流事業へ発展する契機となった。

2023年 南魚沼の取組

2023年は日本酒が主題となった。コシヒカリの産地として知られる南魚沼は名水・銘酒の地でもあるが、近年、若い世代の日本酒離れなどに伴い日本酒の国内市場は縮小傾向にある。また酒瓶は従来、洗浄後の再利用が進んでおり、3Rの代表事例の一つと見られてきた。しかし、コロナ禍でより高度な衛生管理を求められるようになったことから、ガラス瓶洗浄による再利用ではなく、瓶の粉碎後のガラス資源を再利用した瓶の再生産や、他の素材（紙・プラスチック等）の利用が求められるようになり、ガラス瓶はより高コスト、入手困難となった。ガラス瓶とラベルというデザイン性が長らく日本酒というジャンルや各酒造メーカーのブランディング・イメージを形成してきたために、ガラス瓶の存立は日本酒業界には重大な問題であった。

この地域課題に、南魚沼班ではローカル・クール・ジャパンを意識して研究をし、ワイン等も同様の問題を持つお酒のガラス瓶はそのビジュアル性により消費価値を高めていることに着目した。この酒類ガラス瓶の持つ環境・衛生問題の啓発を意識して、南魚沼の銘酒の酒瓶を利用した「酔音」と称する打楽器の考案・作製を行った。これは2024年3月、「酒瓶の楽器とすりこぎ棒のばち 新案権者・川島高峰、考案者・音楽班各ゼミ員」として実用新案登録3245918号を取得した（以上は学部・大学ホームページ参照）。この楽器を利用した新潟県駅構内での演奏の実施、その動画映像の公開などを実施した。

2. 2024年・本助成金による取組

2024年・南魚沼の取組

南魚沼での活動拠点として川島ゼミナールは同市より五郎丸集落の古民家利用の提供を受けていた。この再利用はリノベに向けた試験的、モニター的な利用であり、古民家をそのまま再利用するこ

とを通じて、再整備に向けての問題点の洗い出しを兼ねている。なお、同古民家は明治大学OBの父母・祖父母の実家である。

2024年、南魚沼市の移住媒体『LIFE in』は市の都合から一時休刊となり、同誌へのインターン派遣が困難となったが、その代替活動として、新たに同地域のコミュニティ放送局「エフエム雪国」で地域住民の方と学生による協働で放送番組を編集作成すること、同番組を同地域のSNSインフルエンサー・ぬまめん氏（高野賢氏）と連携協力して作成することなどを、交渉の末、実施することができた。この結果、10分間の放送番組を週に一回、4週にわたり放映することができた。（以上は学部・大学ホームページ参照）。

銘酒の酒瓶を利用して考案・作製した打楽器「酔音」の再活用については、プロモーションの動画作製に終始し、今後、教育委員会を通じた小学校総合教育の場での利用、「FMゆきぐに」の番組での利用などの検討を始めている。

2024年・津南町の実績

この年、スタートアップとなった新潟県津南町での取り組みは、**津南町に高祖父母・祖父母の家**（古民家だが親族が利用する現役の民家）を持ち、幼少より津南町での滞在を繰り返していた学生の同町の地域振興への熱意を契機とした。これを契機に同町役場の観光・産業・農業・教育の各課を挙げてのブリーフィングや現場研修を受けることができた。また同町の民間の交流事業主体である「三箇地区都会との交流を進める会」、じゃらんリサーチセンター（株式会社リクルート）と一般社団法人・雪国観光圏が連携して津南町で実施する「帰る旅研究会」事業との連携を作ることができた点は今後の展開に向けて大きな足掛かりとなることが期待される。

2024年・佐渡市の実績

同じく、この年にスタートアップとなった佐渡市での取り組みも、**佐渡市羽茂地区に高祖父母・祖父母・父母の古民家**がある学生の南佐渡観光振興に対する熱意を契機としたものであった。これを契機に佐渡班の実績は佐渡市が実施する**域学連携事業**に採択されることとなった。また、佐渡市羽茂地区にある学生の親族の古民家を活動の拠点とすることができたので宿泊代は発生しなかった。

活動は①同古民家（廃屋に近い）のリノベの下準備として屋内清掃・古物処理・庭の整備等の実施、②羽茂名産の「おけさ柿」の販売振興のためのPR動画作製、広報媒体作成などの実施、③またこの広報の背景の理解としておけさ柿・ルレクチェの果樹農業の栽培・摘果・出荷・販売及び市場戦略の全過程について研修を行い、移住者による果樹農園経営者からのヒアリングと交流など地方の社会経済・経済文化を深く学習することができた。なお、利用した古民家はリノベ準備のための整備の甲斐あり、古民家宿泊施設として再生することが確定した。また、学部の性格上、地域メディア関係者（さどやにつぼん）との連携活動を織り込むことで、今後の活動の発展につなげることができた。（以上は学部・大学ホームページ参照）。

3. 2025年に実施した取組の発展性／応用内容

南魚沼市について

取組の発展性として南魚沼で活動していた学生が新潟日報に就職することとなり、旧知の同新聞社編集員と再会することとなった。また2023年、南魚沼の活動に参加していた学生が官公庁刊行物を取り扱う出版社「行政」に就職、本活動の実績から南魚沼市を含む上越・南越地域の担当となり、卒業後もこの方面の活動に接点を持ってくれるようになったことである。このような活動の積み上げの成果として、昨年、7月7日、情報コミュニケーション学部と南魚沼市は包括連携に関する協定を締結することとなった。

2025年は昨年、構築したコミュニティ放送局「エフエム雪国」で首都圏の学生と移住及び関係・交流人口促進に資する番組制作を地域住民も交えて作成するというモデルの発展・応用に取り組んでいる。昨年は年末までに南魚沼市の地域おこし協力隊の若者との交流活動から番組制作を行った。これは一昨年2024年のモデルの踏襲となるが、大きく異なるのは、2025年からは収録番組の放送を、「FMゆきぐに」管内（南魚沼市、魚沼市、十日町市、湯沢町等）のみならず、同局が

協定する南関東のコミュニティFM・11局でも放送することとしたことで、番組の可聴人口が1300万人となった点である。勿論、メディアはラジオの時代ではないが、方法論として、首都圏の学生と南魚沼市との関係・交流の促進をはかる目的を、配信の仕組みとして担保したことになる。

このような放送範囲の拡大を受けて、また今年の導入年からの応用発展を企図し、本年は、まず事前に番組制作の準備実修を2025年秋に実施した。この準備実修では、南魚沼市にいる地域おこし協力隊の若者と明大生との対談について10分間の番組2本を作成し、エフエム雪国で放送と再放送、南関東の10局で放送と再放送を実施した。

昨年から、10分間枠の番組作成という実験的な取り組みを続けてきたが、これを経て、特別企画の作成に臨むこととした。この特別企画では、学生が同放送局局長と意見交換を重ねてコンテンツ作成に臨んだ。

企画は「令和黄表紙物語」と題し、南魚沼市・塩沢で生まれ育った鈴木牧之の令和版の『北越雪譜』再現を試みることにした。江戸の出版文化を象徴する蔦屋重三郎の精神をSNSやラジオに重ね、若者の失敗談を含む雪国・南魚沼の日常を発信する。親しみやすい物語を通じて、地域への関心と来訪意欲を喚起することとした。

この企画作成のために2月15日から26日に南魚沼班4名の学生を中心に学生13名が南魚沼市に滞在し、関係団体や市民の協力を得ながら、InstagramをメインにSNSコンテンツ(TikTok、Youtube、統一アカウント名称 @and_minamiuonuma)で、情報発信を開始している。2月末現在、Instagramでの再生回数は最も多い動画の投稿で1700件を超えている(9投稿で7000件)。また、滞在の活動中に新潟県のケーブルテレビ局(NTC)、新潟日報の取材を受けた(放送日、掲載日はまだ未確定)。

津南町について 二年目となる津南町では同町の観光地域づくり課の斡旋を通じて、津南町の地域おこし協力隊隊員に対するヒアリング調査と、同隊員を通じた集落との交流事業の実施を行った。宿泊施設としては、津南町と十日町が共催する「大地の芸術祭」の展示施設では、廃校を展示兼宿泊施設に活用しているものがあり、展示期間外であったがその利用を認めてもらった。上郷・秋山郷の二拠点で地域おこし協力隊員とのヒアリング、集落との交流事業を行い、津南醸造、雪を利用した貯蔵事業、農業土木施設と地誌文化などについて研修を実施した。集落で祭りへの参加は非常に深い印象を学生に残した。

一次派遣では、津南町内を巡り、主要な生活圏や集落の立地、豪雪地帯特有の町の構造について説明を受けた。役場周辺、商業施設、住宅地の配置を確認し、町のスケール感や生活動線を把握した。また、町内各所を視察し、午後は集落単位での見学を行った。農地や住宅、集会所などを実際に見ることで、人口減少や高齢化が地域空間に与えている影響を具体的に理解した。実習の振り返りとして、視察を通じて得た気づきや疑問点を共有し、9月本実習に向けた調査テーマやヒアリング内容について意見交換を行った。

二次派遣では、移住者へのインタビューを中心に以下のことを行った。

- ・照井氏：住民との信頼構築の難しさ、活動を通じた地域との軋轢など移住後の実態に関して聴取。
- ・緒方氏：連鎖廃業が地域経済に及ぼす影響や、事業承継支援における課題に関して聴取。
- ・増岡氏：行事参加による安心感の醸成と、祭りの発信が移住促進に果たす役割に関して聴取。
- ・阿久津氏：深刻な人手不足による現状維持の限界と地域技術の継承・記録の重要性に関して聴取。
- ・永井氏：自治体による受入体制の格差や行政に依存しない伴走型の連携の在り方に関して聴取。

また、町内視察では、雪室等の地域資源や住宅地の住環境、役場・集落の立地状況を確認し、生活基盤の実態に関して視察した。さらにお祭りの運営に携わりつつ、実際に班員も神輿を担がせていただいた。これは長年続いているお祭りであったが、コロナ禍に一度その伝統が途絶えてしまっていたが、それ以来、初めての再開で非常に大切な回であったが、それに相応しいように盛り上げていくことができたと感じる。地域の方々との交流としては、地域の学生や住民との対話を通じ、現場での交

流から見えてくるコミュニティの現状や活性化の実態に関して聴取。

佐渡市について 昨年の佐渡市との取り組みと同様に、本年も同市が実施する域学連携事業に採択された。本年は「さどやニッポン」取締役・相田忠明氏との連携により、佐渡市の伝承文化である鬼太鼓について、相田氏が関わる新穂地区での展開、鬼太鼓の佐渡島内での各地域での特徴について学ぶことが中心となったが、他にも多くの学習要素があった。

伝統文化研修・自然体験として、佐渡金山の歴史学習、矢島たらい舟の操作体験、宿根木の町並み保存地区の視察、佐渡博物館・妙宣寺五重塔・田んぼアート・日吉神社見学の見学を通じ、地域資源の活用状況を調査した。

観光・経済調査として、世界遺産登録に向けた動きや、観光客の動線、地元商店街の抱える課題を現場研修で確認した。

地域コミュニティへの参画として、集落での「お茶飲み会」に参加し、高齢者の生活実態や地域への思いを直接伺うことができた。

さどやニッポンにて相田氏、及び鬼太鼓に携わっている地域住民の方々に鬼太鼓に対する思いや姿勢について、五世代にわたりインタビューを実施し、世代間継承における要因や伝承芸能における所作の変化などについて興味深いインタビューが実施できた。地域おこし協力隊員の岩崎氏から「食」を通じた地域活性化や、空き家を活用した拠点作りについて、羽鳥氏からは、伝統芸能（鬼太鼓）の継承や、SNSを活用した情報発信の重要性についてお話を伺うことができた。

成果報告会は佐渡市役場職員、地元の校友市議、佐渡伝承文化機構の方、さどやニッポンの方などに対して、インタビュー内容、フィールドワークで得られた知見に関する報告会を実施した。

活動計画（活動目的を達成するための具体的な計画や方法、申請団体と連携地域・団体等がそれぞれ担う役割、過年度の活動実績や次年度以降の継続性等について詳しくしてください。）

活動目的を達成するための具体的な手順や方法

南魚沼市 一昨年より同市内の五郎丸集落に古民家利用（旧校友宅、使用料が必要）の提供を受けており、年末まではこれを拠点として活動を続けることができたが、同民家の本格的なリノベなどにより、この2月の実施については役場より紹介された宿泊施設を利用することになっている。宿泊施設の確保について次年度以降は、古民家リノベの終了などもあり、その他の古民家のリノベ前のモニター利用もありうるので継続性は十分にある。また学部との連携協定も継続させることで相互の関係を維持できる。「エフエム雪国」とは局長と学生が頻繁に連絡を取り合う関係となっており、番組作成についてインフラとなるモデルシステムは継承し、コンテンツの内容の創意工夫を続けるという形態で十分に持続可能性がある体制になってきたと考える。

津南町 二年目となることから、関係交流人口政策や事業にかかわる団体・関係者とも一定の信頼関係があり、本年は観光地域づくり課を通じた地域づくり協力隊隊員を中心とした交流事業の推進となった。個々の協力隊員はそれぞれに異なる集落に配置されており、大地の芸術祭の展示施設兼宿泊施設が津南町内に点在するため、システムとして継続の持続可能性は十分にあると考える。

佐渡市 二年目となった佐渡市域学連携事業の採択であるが、本年は佐渡市の同部門が域学連携事業用にゲストハウスを設立したために、学生の滞在期間中の宿泊問題は解消した。これは次年度以降の継続性に決定的な役割を果たすと言える。活動内の用の構築については、今年のスタートアップの年に交流の契機を持った「さどやニッポン」代表取締役相田氏との協議により進めることができ、同氏が担う佐渡市新穂地区中央青年会が主催する伝承文化・鬼太鼓についての調査研修を実施することとなった。その際、佐渡伝承機構等の佐渡のその他の伝承文化関連の関係者とも関わる景気を持つことができ、佐渡市での事業の継続の可能性はさらに強化されたと考える。

地方創成／関係・交流事業の継続性の危機

ここで改めて、本年のプログラム佐渡・津南・南魚沼の全体を振り返り、ここで総括をしておきたい。首都圏の学生と過疎地・里山社会の地域課題の学習と研修を四半世紀続けてきた身として、その危機感と可能性の双方から問題点の指摘と提起をここでまとめておきたい。今、

日本国の地方移住、関係・交流人口は政策においても実情においても大転換期に入っている

からである。この大転換期とは何かを（他にもありますが）2点にのみまとめ、それではどうすればよいのか、展望と本学の地域連携の方途について提言を行いたい。

まず、問題点について、

第一に、地方社会における人材・資金の枯渇であり、これが関係・交流事業の現場にもたらす実情は深刻である。ポストコロナ後、学生の受入活動については、その継続が地域社会には「もう無理」という声が様々な地域現場の担当者から寄せられている。予算難もあるが、学生対応のための人出不足の問題はとて大きい。従前は、直近の地方移住に結びつかないまでも、学生との交流は、在学時・卒業後に観光、あるいは地域の知人・友人への来訪、さらにはごく一部に地方移住に結びつくという中長期的な観点で、大学生との関係・交流人口の施策が理解されてきた。しかし、ポストコロナ以降、もはやその余力はないと明確に拒否する様相となってきた。実情は、人口流出の抑止に精一杯であり、それでも人口流出はおさまらず、継業支援も容易ではない。このため**地方が大学と関わるメリットや余力はない、という思いが寄せられる**（この傾向は以前もわずかにあったが、令和以降、面と向かって言われることが増えた）。

しかし、令和以降のこの劇的な転換には背景がある。コロナ明けの2022年から2024年にかけて所謂「持続化給付金」等（官民の金融機関双方がこのような貸し出しをしていた）の返済期限の到来にあり、そして、コロナにより離職した従業員の復職が困難であったことから、地方は全産業分野で継業困難、後期高齢者の動員、そして、廃業、相も変らぬ人口流出に直面しているからである。この人出・人材の枯渇の最中、2024年からインバウンドは巨大なオーバーツーリズムとなって地方産業の人出不足を直撃することとなった。

第二に、首都圏の若年世代の地方社会との関係性、地方への理解・認知・興味の喪失である。

地方との疎遠化 今日、首都圏が実質、あたかも「東京首都合衆国圏」を形成し、首都圏在住の若者世代の多くが、その出自の地方社会から3世代、4世代を経ることで地方社会との地縁を喪失させている。ネイティブ首都圏民となっているのである。今回の津南町・佐渡市での取り組みは曾祖父母からのつながりを持った学生の縁を端緒とした。これも長寿化のためと言えるが、このような縁の発生は、今後、愈々、減少する。多くの父母・祖父母の世代はその出自の地方との関係性については、孫子の代に負担を継承させないように整理することに努めるために、若者世代とその出自に関わる地方との関係性は「断捨離・終活」の対象である。

若者の地方離れ・旅離れ 今日の若者世代については全体として「旅離れ」、「インナー」、「個室文化化」といったソトコト、アウトドアといった「屋外」「野外」「田舎」の志向は様々な統計において減少傾向にある（例 スキー、ゴルフ、キャンプ、海水浴人口など）。またインバウンドは地方旅行を学生の手には届かない価格帯へ旅行文化を推し上げている。

一極集中型教養の完成 紀行文学に代表されるような自然・地誌と文化社会の関係性、地誌と経済社会の関係性を楽しみの一つとするこれまでの日本人の教養の姿は、全天候型で昼夜のない24時間・常時接続型の巨大空間となった首都圏のメトロポリスを生きる世代にとって**興味・認識・発見の対象外**となっている。それは都市文明型・一極集中型の文化社会であり、一極集中型の価値観を持つ人間と言ってもよい。今日、若者の教養において「ソト」の世界とは、マンガ・アニメ・SNSといったコンテンツに描かれた世界、それ自体となっており、その中で「ソト」とみなされるものである。それは視聴するものであり、体験するものではない。一極集中の結果として高度化した偏差値教

育で訓練されてきたが、彼らの学校知・受験知に里山里海の地方社会を知る余力と経験は殆どない。あっても都会と同じ快適なリゾートホテルの居室と施設外との送迎・往復だけとなる。

「地域課題」理解、以前の「社会以前」 首都圏社会で、コミュニティは機能不全となっており、それが今日の若者の育成環境である。よって、地方のコミュニティの機能や魅力を認知し、接触を試みようという発想がない。例えば、地方への学生派遣に際し学生がこれから行く予定地域に「カラオケ」がないことに気が付き、それを理由にその地方へ行っても意味がないと集团的に考えるようになった学生グループもあった。それは首都圏から他のどこかの首都圏の地方都市へ行くときとか、沢山あるコンビニからどこかの系列コンビニを選ぶ選好比較と似ている。社会に期待するのは「コミュニティ」ではなく「機能」なのである。

近年、関係・交流人口の関係者に「**地方は人口減少で消滅するよりも先に、若者の記憶から地方が忘却されることから始まります**」と言うことを常としている。

地方創成／関係・交流事業の促進にできること、すべきこと

人材の地方還元教育 明治大学は創立者の地域について特別な入試方法を始めると聞き及ぶが、これを端緒として、この際、地方入試で「**地域に人材を還元する入試**」、地域人材還元を要件として選抜や入学後の教育に「**地域継業・創業の支援**」を組み入れた入試を行うことはできないだろうか。既に、地方社会では首都圏の大学へ地域の若い人材が進学することについては、首都圏の大学が若者を地域から「**抜き取る**」という捉え方も少なからずある。昨今の「都民ファースト」の都知事の姿勢に、他の全46知事より批判の声が寄せられたが、「都民ファースト」と「日本ファースト」は、ふるさと納税、地方交付税をめぐる地方議会での議題においても、税制上の利害対立構造を呈している（一部の首都圏自治体の議会で、当該自治体の財源確保としてふるさと納税のみなおしの質問が散見している）。

公正な偏差値至上主義の一般入試という尺度からすると、非合理、不公平の批判もあろうが、そもそも、公正な偏差値至上主義こそ一極集中型の社会を加速させ、人格形成にまで「一極集中的な人材や価値観」の大衆化を招いてきた。今日、良い大学・良い企業・良い家庭という一極集中型のキャリア観・人生観が殆ど選択の余地のない生き方となる他方で、左様な人生モデルがオワコン化している実情もあり、人材の地方還元教育は明治大学の新しい時代に向けた新しい社会への看板となるのではないかと考える。

可能性としてのデジタルとデジタル化支援 今回、地域横断的な観点からの取組の在り方について相談役となって頂いた一般社団法人 雪国観光圏 代表理事・井口智裕氏との意見交換などから、この件を取り上げたい。観光圏という概念は「観光圏の整備による観光旅客の来訪及び滞在の促進に関する法律（観光圏整備法）」（2008年7月）により設けられた地域横断的な新たな機構概念である。観光圏は、地誌歴史・観光文化を共有する地域では行政区分や事業者間の相違を超えた連携を促進し、2泊3日以上滞り・周遊型観光を促進するための広域エリアのことで、既に30の地域と主体が認定されている。しかし、その社会実装化は、途上にあり、他市町村との連携はまだ先の事であることが、今回の佐渡・新潟・南魚沼の3市町の学生研修から知ることができた。したがって、2025年度の取り組みとして、DMOカレッジ（Destination Management/Marketing Organization 地域開発人材育成大学）を構想したのは、時期尚早であった。実際、首都圏でさえDXやAIは導入さえホット・ 이슈である。

しかし、首都圏の大学として、先の指摘も含め二つの大きな可能性を含んでいる。

第一は、首都圏の学生の地方の発見である。ここで「地方」という選択は娯楽においても、キャリアにおいても、教養形成においても認識の外にあり、文化興味的にもコスト的にも地方社会は若者の射程外であることを述べてきた。しかし、逆に、そこに大きな可能性がある。今日の若者世代にとって地方社会は、未知のブルー・オーシャンとなっている。この数年、学生の地方引率に際し、学生の

口から「まるで外国みたい」との発言が散見するようになってきている。これは他の大学や関係者からも言われることである。勿論、この発言は時に好ましくない感情を地方住民に与えてはいるが、今や、**東京首都圏合衆国化した住民の若者にとって、地方社会が圧倒的に新鮮なことは間違いない。**

第二は、デジタル化、A Iの利活用の支援である。SNSのメディアそれ自体の多様化、各機能・仕様の複雑化は著しく、若い世代ほどこの点については有利である。昨今の学生は、以前の学生よりもより高度な内容のコンテンツを明らかに以前よりは早く完成させることができる。

そこで、今後の持続可能性における最大の可能性は、首都圏の学生がまるで外国のような地方を発見し、その新鮮味を若者に伝える事業を組織化することである。**若者を動かすのは若者の言葉**である。地方社会はデジタル化、A I利用に遅れた面について、これを支援する活動を織り交ぜていくことが首都圏の若者と地方の間に新しい関係・交流活動を構成するとの希望を見出すことができた。

活動スケジュール（実施した広報活動についてもご記入ください）

南魚沼班

- 7月30日：ラジオ収録に向け、「FMゆきぐに」局長とオンラインミーティング
- 8月1日：南魚沼市、若井様、刈谷様と協議、魚沼の里、道の駅などを視察
- 8月2日：魚沼スカイラインなどを視察
- 10月5日：南魚沼到着
- 10月6日：「FMゆきぐに」にてラジオ収録・地域おこし協力隊との交流とインタビュー
- 10月7日：六日町地区を中心に視察
- 12月19日 14:00～ 「FMゆきぐに」本放送
- 12月22日 10:00～ 「FMゆきぐに」再放送

他に、下記の関東圏のコミュニティFMラジオ局で再放送

放送エリア：東京都（エフエム西東京・調布エフエム放送・かつしかFM）

埼玉県（エフエム茶臼・レッズウェーブ・FMふっかちゃん）

神奈川県（FMおだわら・横須賀エフエム・FMやまと・FM湘南ナバサ）

前半パート10分編集は2月放送分として配信済み

後半パート10分編集を3月放送分として配信予定

- 1月19日：次回ラジオ収録に向け、「FMゆきぐに」とオンラインミーティング
- 2月15日～2月26日 滞在（現地取材・SNS投稿物作成）
- 2月21日：しおぞわ雪譜祭り取材訪問、ラジオ生中継に参加
- 2月25日午前：市長室にて成果報告
- 2月25日午後：「エフエム雪国」にて番組の収録（放送日程、本放送3月6日10時、再放送3月9日14時に配信、南関東10放送局でも本放送・再放送の配信予定・日程は未確定）

津南班

- 6月25日 リモート移住者インタビュー（照井氏）、実地調査に向けた役場との調整
- 8月19日 第一回実地調査開始、町内視察（雪室、住宅地、役場等集落の立地）
- 8月20日 町内視察、集落見学、
- 8月21日 第一回実地調査終了、実習の振り返りとしての報告会・意見交換会
- 9月22日 第二回実地調査開始、移住者インタビュー（照井氏、緒方氏）、町内視察、
- 9月23日 地域コミュニティ（祭り）への参加、移住者インタビュー（永井氏、増岡氏、阿久津氏）
- 9月24日 意見交換会、第二回実地調査終了

佐渡班

- 6月30日：オンライン事前学習 さどやニッポン相田氏と佐渡実習に関する打ち合わせ

7月27日：佐渡(小木港)到着
7月28日：佐渡博物館、妙宣寺五重塔見学。矢島たらい舟体験。
7月29日：佐渡金山見学。さどやニッポンによる田んぼアート、日吉神社見学。
鬼太鼓に関わる地域住民へのインタビュー。
7月30日：成果報告会。
7月31日：佐渡出発。

連携先からの一言/参加学生からの一言/参加者からの一言（連携先又は参加学生からの一言の場合、所属と氏名をご記入ください。）

所属：川島高峰ゼミナール・南魚沼班 氏名：取り纏め代表 岩崎航大

今回の活動を通じて私は日本の地方創生が抱える「構造的な課題」に直面しました。現在、南魚沼市でも若年層を中心に転出超過が続く「社会減」という厳しい現実にあります。多くの地域おこし協力隊の方々が現場で奮闘されていますが、その広報手段は個人のSNSや自治体HPに限定されがちで、東京一極集中やライフスタイルの画一化の中にある都市部の若者の目には届きません。

一般的に、地方ワーキング・ホリデーなどの施策は、一部では「観光」としての消費に留まってしまいう側面があります。しかし、私たちが現地で目にした南魚沼市のワーキング・ホリデーでは、地域住民や同世代との深い交流を通じ、「当事者意識」を育む「縁」を結ぶことが非常にうまくいっていました。この成果を肌で実感したからこそ、私たちメディアを志す者も、単なる情報発信を超えて「当事者意識」を育む「縁」を結ぶことが今、最も必要なことだと確信しています。

私たちは今回、1,300万人もの潜在リスナーを持つ「南関東のメガFM」という強力なプラットフォームを活用する機会を得ました。しかし、どれだけ大きな媒体であっても、単に「活動を知らせる」だけのコンテンツでは、都市部の人々の心を動かし、深い関わりへと「結ぶ」ことはできないという課題も痛感しました。

そこで見出した希望が、地方コミュニティFMが持つ「現場の深い熱量」を、関東のFMが「都市部の文脈」に翻訳して拡散するという戦略的連携です。実際に「にぎりたてラジオ」の収録で出会った協力隊の方々は、AI技術の活用や人口減少社会を若者の観点から鋭く考察する、非常に刺激的な存在でした。この現場の熱量を情報の孤立から救い出し、都市部へと繋ぐことで、地方の影響力を最大化できるはずでした。

この影響力を真に生かすために、今後は以下の3点が必要だと考えます。第一に、都市部の若者が「自分事」として捉えられるストーリー構築。第二に、SNSを起点に多角的なきっかけを作る立体的な広報。そして第三に、東京の価値を過剰に高めるのではなく、地方にしかない価値を正当に評価する「一極集中」への問い直しです。

結びに代えて、私は今後、このラジオがリスナーの意識をどう変えたかという「影響分析」に取り組むと考えています。放送後の反応を分析し、都市部の若者が抱く「画一化された生活」への違和感が、地方との新たな「縁」にどう変わったのかを検証していきます。

「影響力」とは、ただ放送圏が広いことではなく、聴いた人の「当事者意識」をどれだけ揺さぶれるかにあるはずでした。今回の学びを糧に、メディアの力を通じて地方と都市の幸福な関係性を模索し続けていきたいと思えます。

所属：川島高峰ゼミナール・佐渡班 氏名：取り纏め代表・根岸玲音

今回の佐渡派遣を通して、佐渡島の伝承芸能「鬼太鼓」を担う方々から3つのことを学ぶことができた。第一に、「伝承芸能に対する熱は首都圏では見ることができない」ということである。首都圏

には、地域の生活に根付く伝承芸能というものを見ることはあまりない。そのため、首都圏の大学に通っている私たち学生は伝承芸能を「保存されなければならないもの」というような悲観的な見方をしていた。しかしながら、インタビューのなかで「保存したいからやっているのではなく、かっこよくて自慢したいからやっている」というような話を聞き、首都圏では感じる事ができない伝承芸能に対する熱量を感じることができた。

第二に、「子供が親の鬼太鼓を見てかっこいいと思う」ということである。インタビューのなかで、「お父さんが踊っているのがかっこいい」という話があった。親が熱量をもって取り組むことにかっこいいと感じる価値観は、首都圏ではなかなか感じる事ができない。そのような点において、鬼太鼓は地域や家族のつながりを強くするツールとしての役割があると考えられる。

第三に、「鬼太鼓を保存・継承するためには形を変えていく必要がある」ということである。地方地域の人口減少によって、鬼太鼓のような芸能を伝承することは難しくなっている。地域芸能を保存していくためには、鼓童や「よさこい」のように変化していくことも必要であると考えられる。

所属：川島高峰ゼミナール・津南班 氏名：取り纏め代表・神山颯太

津南町での実習を通して、私は都市では感じる事のできない地域コミュニティの在り方と、地域おこし協力隊の方々の生の声に触れ、地方で暮らすことの意味を深く実感した。

特に印象的であったのは、地域住民同士の距離の近さと、互いを自然に支え合う関係性である。船山神社の伝統祭りでは、数百年続く行事に地域の方々が世代を越えて関わり、神輿を担ぎながら声を掛け合う姿が見られた。担い手不足やコロナ禍の影響を受けながらも、祭りを絶やさないために地域全体で工夫し支え合う様子は、都市では失われつつある「顔の見えるつながり」を象徴していると感じた。祭りや交流拠点での何気ない会話の中にも、住民同士の信頼関係が日常に根付いていることが伝わり、コミュニティが地域を支える土台になっていることを肌で感じた。また、こうした関係性の中では、一人ひとりが地域の一員として役割を持ち、互いを気遣いながら暮らしていることが自然に受け入れられており、その姿は都市生活ではなかなか経験できないものだと強く印象に残った。

もう一つ強く印象に残ったのが、地域おこし協力隊として活動されている方々の生の声である。事業承継の支援、観光のあり方、協力隊と行政の関係づくり、そして定住だけにとらわれない関係人口の創出など、実際の現場で向き合っている課題や取り組みについて率直な話を伺う中で、地域づくりが決して簡単なものではないことを実感した。同時に、目の前の人や地域の未来を自分事として捉え、試行錯誤を重ねながら町を良くしようとする強い覚悟と責任感が伝わってきた。机上の政策や制度論だけではなく、現場で悩み、考え、行動し続ける人々の存在こそが地方創生を支えているのだと実感することができた。

今回の実習を通して、地方の魅力とは単なる自然環境や観光資源だけではなく、人と人とのつながりと、地域を想い行動する人々の存在そのものであると気づいた。津南町で出会った人々の姿は、これからの社会において地域とどう関わっていくべきかを考える上で、大きな示唆を与えてくれた。この学びを今後のゼミ研究はもちろん、自身の進路選択や生き方にも活かしていきたいと考えている。